

## 初年次教育学会第8回大会

菊地 滋 夫<sup>\*</sup>

The 8<sup>th</sup> Annual Conference of Japanese Association of First-Year Experience at Universities and Colleges

Shigeo Kikuchi

キーワード：初年次教育学会、高大接続、多様性、アクティブ・ラーニング

Japanese Association of First-Year Experience at Universities and Colleges, high school/university connection, diversity, active learning

### 1. はじめに

2015年9月3日（木）と4日（金）の両日、明星大学日野校において初年次教育学会大8回大会が開催された。主催は初年次教育学会であり、明星大学が共催となっている。本稿では、大会テーマ及び公開シンポジウム、企画セッション、自由研究発表を振り返り、その意義と課題を整理しておきたい。

しかし、それらについて述べる前に、初年次教育学会と開催校である明星大学の関係について簡単に触れておく必要があるだろう。

まず、初年次教育学会についてであるが、同学会の立ち上げは2008年のことである。周知のように、21世紀初頭の日本の高等教育は、進学率が50%を超えるユニバーサル・アクセスの段階を迎えており、入試における選抜性が高くない多くの大学では、ほぼ例外なく、基礎学力や学習意欲の多様化が顕著になっていた。退学やそれにつながる留年をいかに減らし、卒業時の質保証を行うかが切実な課題であった。文部科学省中央教育新議会の答申等で、高校から大学へ、生徒から学生への円滑な移行を促進する初年次教育の重要性が明確に指摘されるようになったのもこの頃である。本稿執筆現在も続くこうした状況を踏まえて、初年次教育の様々な実践や研究成果を共有し、さらなる発展・深化を図るべく設立されたのが初年次教育学会である。

筆者から見て初年次教育学会の特徴と思われる点についても付言しておく。それは学会員の構成に関することである。

学会の立ち上げメンバーや現在の理事会には、教育学系の専門家が比較的数量多く名を連ねている。しかし、大会において研究発表を行う会員は必ずしもそうではない。文系のみならず、理系や工学系などの諸分野で初年次教育に熱心に取り組む教員による示唆に富んだ発表も少なくない。また、教育学系の専門家が比較的多いとはいえ、初年次教育そのものを研究し、初年次教育の研究で博士号を取得し、初年次教育こそが専門であると言い切ることのできる教員は、国内ではごく少数にとどまると思われる。初年次教育学会の成り立ちや、決して長いとは言えない日本の初年次教育の歴史に鑑みても、会員に初年次教育を専門としてキャリア形成をしてきた研究者が少ないということは容易に想像される。筆者もまたそうなのだが、元々は初年次教育以外の専門領域を持つ大学教員が会員の大半を占めると

---

<sup>\*</sup> 人文学部 国際コミュニケーション学科教授 初年次教育学会第8回大会実行委員長

いう点は、初年次教育学会の特徴と言えるだろう。

さらに言えば、大学職員が大会に多数参加して積極的に研究発表を行っている点も特筆すべきである。まず、初年次教育と言った場合、それは正課の授業のみを指すわけではない。初年次の学生を対象とした各種のガイダンスやフレッシュマンキャンプ、その他の様々な指導やサポートも含めて初年次教育なのである。これらの体系だった実施は教員だけでは到底不可能であり、大学職員の果たす役割が極めて重要なのは言うまでもない。また、初年次教育的な授業科目を担当する教員のほとんどは、上述のように、初年次教育を専門としているわけではない。いかなる担当科目であっても、実施に際しては職員によるサポートは重要だが、不慣れな初年次教育科目を担当すると、職員からのサポートがますます必要となることは必然である。そして、明星大学が近年取り組んでいるように、学部や学科の壁を超えて組織的に初年次教育を実施する場合にはなおさらである。こうしたことから、他の学会に比べて、初年次教育学会の会員や参加者には職員が非常に目立ち、この学会への参加を通して教職協働が促進されてゆくという側面も指摘できる。

次に、初年次教育学会と明星大学の関わりについて述べる。

初年次教育学会が立ち上げられた時期には、明星大学もまた日本国内の多くの大学と同様の課題に直面しており、2008年度には全学的な初年次教育の検討が開始されることとなった。2009年9月に兵庫県の関西国際大学で開催された初年次教育学会第2回大会には、筆者を含む多数の教職員が参加して情報収集に努めた。この年には、初年次教育学会初代会長である同志社大学の山田礼子教授と、後に同学会会長となる久留米大学の安永悟教授を本学FD研修会にお迎えしてご講演をいただくなど、明星大学は多大な学びの機会を得ることができた。このように、初年次教育学会の恩恵を受ける形で検討を深めることができた明星大学では、2009年度末に開催された大学評議会における決定に基づき、2010年4月より学部学科横断クラスにおけるアクティブ・ラーニングを最大の特徴とする全学共通初年次教育科目「自立と体験1」がスタートした。これとあわせて、その科目運営を担当する明星大学明星教育センターが開設された<sup>1</sup>。

明星教育センターは初年次教育学会の機関会員となり、以来、毎年開催される初年次教育学会に教職員を派遣し、情報収集のみならず、全国から同学会に参加する大学関係者に向けて「自立と体験1」に関する成果や課題についての情報を積極的に発信している。初年次教育学会における報告の大半は、同学会の会員である熱心な教員が個々に担当する初年次教育的な科目の事例である。また、組織的な取り組みの事例が報告されることもあるが、ほとんどの場合は、学部や学科ごとに実施される授業についてである。その点、明星教育センターを中心として全学的に初年次教育を推進する本学は、全国の大学から注目を集める存在となっている。こうした経緯もあって、2015年開催の初年次教育学会第8回大会は明星大学で開催される運びとなったのである。

## 2. 大会テーマ

近年、初年次教育学会が開催する大会では、公開シンポジウムのテーマと合わせて「大会テーマ」を掲げることが慣例となっている。たとえば、2013年に金沢工業大学で開催された第6回大会では「初年次教育から始めるキャリア教育」、翌2014年に帝塚山大学で開催された第7回大会では「初年次教育における自己表現：表現から実現へ」が大会テーマとされた。大会テーマは、自由研究発表などもすべてこれに沿って行わなくてはならないというような性格ではないが、当然、そこには当該の大会を企画する実行委員会が重視する意図が色濃く反映され、大会プログラム、要旨集、大会ホームページ、ポスター、チラシなどに繰り返しその文言が掲載されることになる。したがって、大会参加者は多かれ少なかれ大会テーマを意識することになると思われる。

明星大学で開催された初年次教育学会第8回大会では、「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」を大会テ

マとした。このテーマ設定には、日本国内の大学初年次教育のコンテキストや前提そのもののラジカルな転換が関係している。

従来の初年次教育は、高校までの勉強と大学で求められる学びにはある種の断絶があるという前提に基づいて実施されてきた。具体的にいうと、大学進学を目指す高校生は、入試を突破することを目指して知識偏重の暗記中心の勉強をせざるを得ないことから、どうしても受け身の座学に偏りがちになるため、大学で求められる主体的な学びへの転換を図るために、初年次教育が必要とされるという考えである。また、そうした入試を避けて推薦入試やAO入試で大学へ進学した学生も、基礎学力や学習意欲という部分で多様化が進んでおり、大学で必要とされる水準へと引き上げるために、高校や中学までに身につけておくべき基礎学力の不足を補うためにはリメディアル教育が導入され、学習意欲を喚起する目的では初年次教育に期待が集まった。それぞれの大学の歴史や特色によって事情は異なるにせよ、何らかの意味で高校と大学には大きなギャップがあるとの認識に立って、高大の断絶を埋めて接続するために、初年次教育は日本国内の90%を超える大学に導入されてきたと言って良い。

このような状況は、しかし、近年の高大接続をめぐる議論のなかで、解決が模索されてきた。そして、解決の方向性は、2014年12月22日に文部科学省中央教育審議会がまとめた、いわゆる「高大接続答申」（「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」）に示された。ここでは、従来知識偏重との批判がなされてきた大学入試センターが実施する入試（いわゆるセンター入試）を廃止して、物事を多角的に検討し、深く考える力を測定するような入学者選抜によって置き換えるといった方向性が提示され、これとあわせて高等学校以下の学習指導要領も生徒がより主体的に学び、考えることができるよう、アクティブ・ラーニングへの転換が進む道筋も明らかになった。大学関係者やメディアの注目は、大学入試改革という点に集まる傾向が見られるが、この改革の狙いは入試を変えるということにあるというよりも、むしろそれによって高校までの学びを、知識の習得を目的とした座学中心の受け身の勉強から、より生徒中心の能動的な学びへと転換することにあるのである。こうした動きを導き出すための入試改革が実行され、軌道に乗るまでには、なお一定の期間が必要とされるが、能動的な学びに慣れ親しみ、何らかの程度でそれを身につけた高校生が大学進学を目指す時代の到来は時間の問題となってきた。

このような動向を受けとめた首都圏の小学生を対象とした進学塾や、大学受験を手がける大手予備校は、日頃の授業のなかに早速アクティブ・ラーニングを取り入れるようになった。また、私学を中心に、学習指導要領の改定を待たずに、アクティブ・ラーニングを組織的に導入する高校も現れるようになった。このことは、高校と大学の間にはギャップがあることを前提に、受け身の生徒をより能動的な学び手としての学生へと移行させるプログラムとして位置付けられてきた初年次教育が、大きな転換点に立つことを意味している。これから大学に入学してくる新入生は、程度の差こそあれ、入学時点ですでに能動的な学び手である可能性が年々高まると予想されるからである。大学教員が新入生に向けて語る「君たちは高校までの座学中心の勉強から、大学生にふさわしい能動的な学びへと転換しなくてはならない」という常套句に対しては、「大学の講義の方がよほど退屈な座学ではないか」という新入生からの批判が即座に帰ってくることになるだろう。

初等教育においては、中等教育に先行してアクティブ・ラーニングが浸透しつつある。そして、上記の高大接続答申を経て、中等教育もまたアクティブ・ラーニング化してゆく道筋が示された。近い将来に到来する新たな状況にあって、これまでの初年次教育が再想像/創造されなくてはならないことは明らかである。以上のことから、初年次教育学会第8回大会のテーマは、「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」に決定し、同テーマを掲げた公開シンポジウムはもとより、本大会開催中に行われる自由研究発表や企画セッションの通奏低音となったのである。

### 3. 公開シンポジウム

公開シンポジウム「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」は、大会初日の9月3日（木）午後2時より6時頃にかけて開催された。会場は明星大学日野校32号館108教室、参加者は本学教職員74名を含む総勢351名である。司会は明星教育センターの鈴木浩子特任准教授、趣旨説明とモデレーターは筆者が担当した。

公開シンポジウムのプログラムは以下の通りである（時間は省略）。

#### 第1部 開会式・趣旨説明

基調講演「未来に生きる人々のために」

安西祐一郎氏（独立行政法人日本学術振興会理事長、前中央教育審議会会長）

#### 第2部 報告とパネル・ディスカッション

質疑応答

報告1 「平山小学校における新たな学びの実践」

五十嵐俊子氏（日野市立平山小学校校長）

報告2 「アクティブラーニング型授業による藤沢清流高校での組織的な授業改善」

小島昭彦氏（神奈川県立藤沢清流高等学校総括教諭）

報告3 「中東・東南アジアにおける児童中心主義の教育の浸透と課題」

今野貴之氏（明星大学助教）

報告4 「学校種を越えた連携と大学初年次教育」

安永悟氏（久留米大学教授・初年次教育学会会長）

#### パネル・ディスカッション

総括

公開シンポジウム冒頭の趣旨説明において、筆者は、現在進行中の改革は、初等中等教育から高等教育に至るまでの教育システム全体が「生徒・学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見出していくアクティブ・ラーニング」へと舵を切っていく改革であることを確認した。そのうえで、大学教育の起点としての初年次教育が、今後どのような役割を果たしていくべきかを検討することが課題であるとし、その検討に際しては、各大学がそれぞれの歴史や特色を踏まえることが重要であるとともに、大学内部での閉じた議論に終始したり、高校と大学の間でのすり合わせだけに終わっても不十分であると述べ、小学校、中学校、高等学校、大学といった学校種を超えた対話の継続と発展が極めて重要になると指摘した。

第1部の基調講演では、安西祐一郎氏（独立行政法人日本学術振興会理事長、前中央教育審議会会長）が「十分な知識・技能を持ち、それを活用できる思考力・判断力・表現力を臨機応変に発揮でき、主体性をもって多様な人々と協力して学び、働くことのできる力が身につく教育の機会をすべての子どもたちに持てるようにするにはどうすればよいか？」という課題に対して、2020年までに「高大接続システム改革」を開始するとの展望を示した。そのうえで、大学1年生を対象に自身が取り組んできたFuture Skills Project研究会（FSP研究会）の6年にわたる議論と5年間の実践を紹介した。

FSP講座の実践から見出されたのは、日本の大学生に最も必要な主体性は、意欲の高い入学時（1年春学期）に社

会との接点を持つ過程で育まれてゆくことだという。FSP 講座では学生が少人数のチームを組み、企業から出される課題に取り組む。課題とは、「〇〇社のブランドを世の中に周知するための施策を提案しなさい」とか「△△証券の一員として、より良い社会を実現するために魅力的な投資対象を決め、根拠を示しなさい」といったリアルなもので、ある程度経験のある社会人にとっても容易でない内容である。学生たちは情報を収集し、ディスカッションを重ねて企業側に提案するのだが、当然、様々な不備を指摘される結果となる。そして、ここでの苦い経験を振り返りながら、学生たちはメンバーをシャッフルして新たなチームを組み、次の企業から与えられた課題に再度挑戦する。こうした一連の活動を通して、学生たちは知識やスキルを学ぶ必要性を自覚し、主体的な学びを身につけてゆくという。大学初年次における、まさに「主体性をもって多様な人々と協力して学び、働くことのできる力が身につく教育」の実践報告であった。

第2部では、基調講演への質疑応答に続き、アクティブ・ラーニング、すなわち「主体性をもって多様な人々と協力して学び、働くことのできる力が身につく教育」についての4つの報告がなされた。

まず、五十嵐俊子氏（日野市立平山小学校校長）からは、教職員がビジョンを共有し、ICTを活用した新たな学びを推進してきた経緯が紹介された。それは学力の向上を目指すとともに、主体的な学びをも目指すものであり、防災教育を基盤として新たに開発されたカリキュラムである「生き抜く科」では、協働的な問題解決学習としてのアクティブ・ラーニングが実践されているという。

初等教育の現場からの報告に続き、高等教育、しかも公立の高等学校より、小島昭彦氏（神奈川県立藤沢清流高等学校総括教諭）が組織的なアクティブ・ラーニングの導入の事例を紹介した。ここでは、個人の試行錯誤から始めて改善を図り、やり方を統一することなく、少しずつ仲間の輪を広げてゆくという方法が採られている。

続いて、東南アジアから中東、さらにはアフリカに至る広い国際的視野から、教師中心ではなく、学び手である児童を中心とした教育を研究している今野貴之氏（明星大学助教）が、今回は中東及び東南アジアの事例に基づいて、アクティブ・ラーニング導入に際しての留意点を指摘した。それは、教育が単純に移転可能な技術ではなく、文化であるとの認識に立ち、教員と児童生徒の双方が意識を協働的なものへと変容させる必要があるというもので、そのため仕組みづくりも求められるという。

最後となる4番目の報告では、安永悟氏（久留米大学教授・初年次教育学会会長）が、初等中等教育から大学教育までの幅広い領域で協同学習の普及に尽力してきた経験を踏まえ、社会における様々な現場で活躍できる人材を育成するためには、協同学習を基盤としたアクティブ・ラーニングを展開することが重要であることを論じた。

以上の報告に続いて、基調講演をお願いした安西祐一郎氏と報告者4名をパネリストとしてディスカッションを行った。論点は、(1) アクティブ・ラーニング（AL）導入の是非について、(2) ICTの積極的活用はいかにあるべきか、(3) 大学初年次教育と社会という3点であった。(3)では、大学教育の起点としての初年次教育は、FSP講座のように社会との接点を意識させるべきかどうかという点をめぐって意見交換を行った。FSP講座に関しては、学生が大学に入学して早い時期から企業と接点を持つことに対して教授会などから慎重論が出されるケースもあるようだが、ここでのパネル・ディスカッションでは、フロアからの反応も含めて、肯定的、積極的な論調が支配的であった。

近年、高大接続や大社接続（大学と社会の断絶を乗り越えて接続する試み）を目指したシンポジウムなどが盛んに開催されるようになった。初年次教育学会第8回大会の公開シンポジウム「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」もまたそうした流れに通じる性格を有するものであろう。しかし、初等教育、中等教育、大学教育関係者が集い、海外の動向をも視野に入れて濃密な議論を交わす機会は希少であり、その意味で貴重なものであったに違いない。本シンポジウムの趣旨説明、基調講演、質疑応答、報告、パネル・ディスカッション、そして最後の総括までの詳細は、テープ起こしを経て『初年次教育学会誌』第8巻に掲載される予定なので、今後の検討の参考になれば幸いである。

# 初年次教育学会 第8回大会

会期 2015年9月3日(木)・9月4日(金)  
会場 明星大学 日野キャンパス

9月3日(木) 第1日目	
09:00~	受付開始
10:00~12:00	企画セッションI ワークショップ ラウンドテーブル
13:00~13:30	総会
14:00~17:40 (開場 13:30~)	公開シンポジウム 【テーマ】 「変わる初等中等教育の学びと 大学初年次教育」 開会式、趣意表明 第一部 基調講演 第二部 報告 パネルディスカッション 総括
18:00~20:00	懇親会
9月4日(金) 第2日目	
09:00~	受付開始
10:00~12:00	自由研究発表I
13:00~15:00	企画セッションII 課題研究シンポジウム ワークショップ ラウンドテーブル
15:10~17:10	自由研究発表II
17:30~17:40	閉会式

**参加費 / 申込み**

- 個人会員・賛助会員※1・賛助会員※1 事前申込※2: 4,000円 当日申込: 5,000円
- 非会員 当日申込: 5,000円
- 個人会員(学生) 事前申込: 2,000円 当日申込: 2,000円
- 非会員(学生) 当日申込: 2,000円
- 公開シンポジウムのみに参加される方 無料(右側の申し込み方法をご参照ください)

※1 懇親会費を含む賛助会員については、懇親会として懇親 催費で申し込みください。  
※2 事前申込は、大会ホームページより申し込みください。※3 個人会員・賛助会員・賛助会員のみとなります。  
第8回大会ホームページ: <http://www.nino.meisei-u.ac.jp/ryeb/>

**懇親会費** 会員・非会員とも5,000円

## 公開シンポジウム



「変わる初等中等教育の学びと  
大学初年次教育」 主催: 初年次教育学会  
共催: 明星大学 後援: 文部科学省

2015年 **9月3日(木)**  
14:00~17:40  
(受付 13:30) 開会式・趣意説明 14:00~  
場所: 明星大学 32号館 108教室

日本の初等中等教育の学びは、変化するべき大学入試制度と併せて、アクティブ・ラーニング中心の学びへと大きく変わろうとしています。本公開シンポジウムでは、前中央教育審議会会長として教育改革をリードしてこられた安西祐一郎先生を基調講演にお迎えし、初等中等教育から大学教育までの教育システム全体の近未来について多角的に議論してまいります。



第1部  
基調講演 14:20~15:20  
「未来に生きる人々のために」  
安西 祐一郎 氏

独立行政法人日本学術振興会理事  
前中央教育審議会会長

### 第2部 報告とパネル・ディスカッション

- 15:35~15:50 質疑応答
- 15:50~16:40 報告
- ◆報告1. 平山小学校における新たな学びの実践  
五十嵐 俊子 氏 (日野市立平山小学校校長)
- ◆報告2. アクティブ・ラーニング型授業による藤沢清流高校での組織的な授業改善  
小島 節彦 氏 (神奈川県立藤沢清流高等学校総務部長)
- ◆報告3. 中野・東海アジアにおける児童中心主義の教育の浸透と探訪  
今野 真之 氏 (明星大学教育学部助教授)
- ◆報告4. 学校種を越えた連携と大学初年次教育  
安永 信 氏 (久留米大学教授・初年次教育学会会長)

**お問合せ** ※できるだけEメールにてお願いします。  
E-mail: [ryeb@mu.meisei-u.ac.jp](mailto:ryeb@mu.meisei-u.ac.jp)  
初年次教育学会 第8回大会実行委員会  
明星大学明星教育センター内  
〒131-8506 東京都中央区本町5-1-1  
TEL:042651-8534 FAX:042651-6949

### アクセス



### 公開シンポジウムのみに参加される 申し込み方法について

**参加費** 無料  
※但し初年次教育学会第8回大会の他のプログラムに参加の場合は有料となります。

**申し込み方法** 公開シンポジウムのみに参加申込みされる方は、メールにて、初年次教育学会第8回大会事務局宛にお申し込みください。なお、申込みの際は、職名に「9月3日 第8回大会公開シンポジウム参加申込み」として、①所属、②職名、③氏名(フリガナ)をお知らせください。お申し込みは、8月22日(土)までお願いいたします。

※但し初年次教育学会第8回大会の他のプログラムに参加される場合は、会費の他、第8回大会ホームページより申し込みください。非会員の方は、当日大会受付にお申し込みください。

写真 初年次教育学会第8回大会および公開シンポジウムのチラシ

## 4. 企画セッション

企画セッションは、大会開催期間中に、公開シンポジウムと自由研究発表とは別に催される集まりであり、ワークショップ、ラウンドテーブル、課題研究からなる。

ワークショップは、初年次教育に関する知識や実践的スキルの向上させることを目的に、初年次教育学会理事が設定したテーマをめぐってグループディスカッションなどを行うものである。ラウンドテーブルは、学会員が企画する自由な意見交換の場である。また、第7回大会より始まった課題研究では、研究担当理事が中心となって初年次教育に関わる重点課題が設定される。今大会では「課題研究 シンポジウム」との名称で開催され、「高大接続の新段階における初年次教育の新たな役割と学会への期待」をテーマに、熱のこもった議論が展開された。第8回大会では、ワークショップ7件(前回大会11件)、ラウンドテーブル5件(同2件)が行われた。学会理事が設定するワークショップは減少し、学会員が企画するラウンドテーブルは増加したことから、大会の性格が「初年次教育の基礎を学ぶ段階」から次第に「実践を通して得られた知見を共有し、さらに発展させる段階」へと移行しつつある、と見る事ができるだろう。

ラウンドテーブル5件のうち2件は、明星大学の教職員が企画者に名を連ねている。明星教育センター事務局の御厨まり子課長が企画者の一人となった「初年次教育における職員の役割について-職員主体と教職協働-第3報」と、同センターの榎本達彦特任准教授が企画者となった「初年次教育と専門教育はつながるのか?」である。大会の開催校として、事前の準備はもとより、開催期間中の様々な対応に追われる厳しい条件下であったにも関わらず、こうした重要なテーマを掲げたラウンドテーブルを2件も企画し、成功裡のうちに実施することができたということは、初年次教育学会における本学の貢献あるいは立ち位置といったものを示していると思われる。

これらの他のテーマは、「初年次教育における自己表現教育の可能性－人間らしさ・芸術性・クリエイティビティーが求められる時代に－」「こうしたら学生の学びは深まる：コーチングとピアラーニングによる学びのベース作り」「授業改善のアイデア集～初等中等教育の学びを生かした初年次から専門教育へ」であった。「初年次教育における自己表現教育の可能性－人間らしさ・芸術性・クリエイティビティーが求められる時代に－」は、前回の大会テーマを引き継ぎ、さらに発展させたものである。そして、他の二つは初年次教育に関わる現場から見出された知恵と工夫を発信し、参加者とともに共有することを目指したものであった。

初年次教育学会のラウンドテーブルのような、大学の垣根を越えてじっくり意見交換を行うような取り組みは、今後ますます重要なものになるのではないだろうか。ここでは、そのように考える理由を少しだけ述べておきたい。

18歳人口が再び急激に減少へと向かう、いわゆる2018年問題を間近に控え、日本の各大学は生き残りをかけた熾烈な競争的環境にあると言われる。確かにこの事実は否定できない。しかし、競争という側面にばかりに焦点を合わせたメディアの報道や大学関係者の言説には、わたしははささか違和感を覚えている。知の伝承と創造、あるいは変革を担うべき存在としての大学は、たんに自分の大学が生き残れば良いという姿勢で良いのだろうか。社会・経済・政治・科学技術・人や情報の動きなど、あらゆる面で変化がいつそう激しくなることが予想されるこれからの時代にふさわしい教育はどのようなものか、という大きな問いに対して、大学は競いあうだけで良いのだろうか。競争がいついかなる場合でも絶対に良くないという訳でもないだろうが、逆に競争がすべてでもないはずだ。この場合、むしろわたしは各大学がそれぞれの違いを活かして知恵や工夫を出しあって協働し、同時代の共通する課題に対して、より良い解決策を探るべきではないかと思う。このような意味で、第8回大会のラウンドテーブルが質量ともに充実したものであったことは、歓迎すべき方向であると考えている。

## 5. 自由研究発表

自由研究発表は、「学士課程教育」「学習成果・効果測定」「授業デザイン・ジェネリックスキル」「医歯薬看護系」「自己表現」「スタディスキルズ」「ピアサポート・教職協働」「学習意欲・動機」「協同学習・グループワーク」「キャリア教育」「高大接続」などのカテゴリーに分けて行った。しかし、複数のカテゴリーにまたがる内容の発表はかなりの数に上るため、分野ごとの増減などの特徴については一概にまとめることはできない。単純に発表件数で見ると、今回も前回大会と同数の51件があり、実践に基づく幅広い研究が依然として盛んに行われていることを示す結果となった。

以上について、2点ほど私見を述べておきたい。

まず、以前から組織的に初年次教育に取り組んでいる大学は、小規模または中規模の私立大学や理工系の分野で見られる一方で、文系や比較的規模の大きな大学では、初年次教育への取り組みは、従来通り、熱心な教員個人の努力に依存しているという傾向である。こうした努力の成果や、努力を通して浮かび上がってきた課題が初年次教育学会で共有されるのは非常に貴重なことであり、大会を開催する意義でもある。だが、組織的な取り組みが必ずしも飛躍的に拡大しているとは言えないのも事実であろう。このような現状を前に、どこか複雑な思いが残る。もちろん何でも組織的にやれば良いというものでもないし、教員個人の努力は当然尊重されるべきである。しかし、教員間の認識や熱意、努力などのバラツキの結果、勉強/学びにおける高校と大学のギャップが適切に架橋されていない学生が少なくないとすれば、それは残念なことと言わざるをえない。高校と大学を接続するという今日の共通課題に対応するために、組織的な取り組みを促すような教職員間の協働はさらに推進されてしかるべきである。

もう一つは、大学と社会の接続、いわゆる大社接続に関する事柄である。教員個人の努力であるにせよ、教職協働を通じた組織的な取り組みであるにせよ、初年次教育学会が立ち上げられて10年足らずの間に、大学はかつて考え

られなかったほど教育機関としての性格を強めている。しかし、大学を取り巻く社会、とりわけ大学が送り出す卒業生を受け取る企業などは、この事実をどの程度認識しているのだろうか。わたしは企業の側の姿勢を一方的に批判しているのではなく、大学が教育改革の成果や課題を社会に向けてきちんと発信しているのかという点も含めて、大学と企業との相互の理解が、果たしてどの程度醸成されているのだろうかと問うているのである。初年次教育学会第8回大会では、熱意あふれる取り組みの成果や課題が数多く報告された。しかし、それがどこまで大学業界の枠を超えて社会に届いているかは心許ない部分があり、大学と社会の対話は今後の大きな課題であるとの思いを強くしている。

## 6. 謝辞 —むすびにかえて—

本大会の準備から開催に至るまでは、明星教育センターの教職員が文字通り中心的な役割を担った。原田センター長、合田副センター長、御厨課長をはじめとする教職員の献身的な努力こそが、大会を豊かな学びに満ちた機会とした原動力であった。また、他部署に所属する休暇中の職員や学生たちからのボランティア的な応援を得て、日本全国から400名近くの参加者を集めた本大会は盛況のうちに終了した。

初年次教育学会理事の方々には大会実行委員会に加わっていただき、示唆に富んだ多くの助言をいただいた。また、座長として各セッションの議論をファシリテートしてくださったのも学会理事のみなさまである。理事会の全面的なサポートなしには大会の成功はなかったのは間違いない。この場を借りて、改めて心より御礼を申し上げたい。

「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」というテーマを掲げた本大会の成否は、しかし、実はこれからの数年間の取り組みを通して答えが見えてくるのかもしれない。学内においては教職員と学生がいっそう協働し、新たな時代にふさわしい教育のあり方を探ること。そして、大学間、高校と大学（高大）、大学と社会（大社）の対話を重ねるなかでも、そうした探求を深めてゆくこと。こうした真摯な探求の積み重ねがやがて小さな光を見出したとき、明星大学で開催された初年次教育学会第8回大会は、ささやかだが重要なターニング・ポイントだったと言えるのではないだろうか。

### (注)

- 1 明星教育センターの主たる業務は、明星学苑の建学の精神に基づく教育理念、教育目標、教育実践に関する研究及び広報活動を行うとともに、全学的な入学前教育・初年次教育・キャリア教育を企画し、実践していくことである。